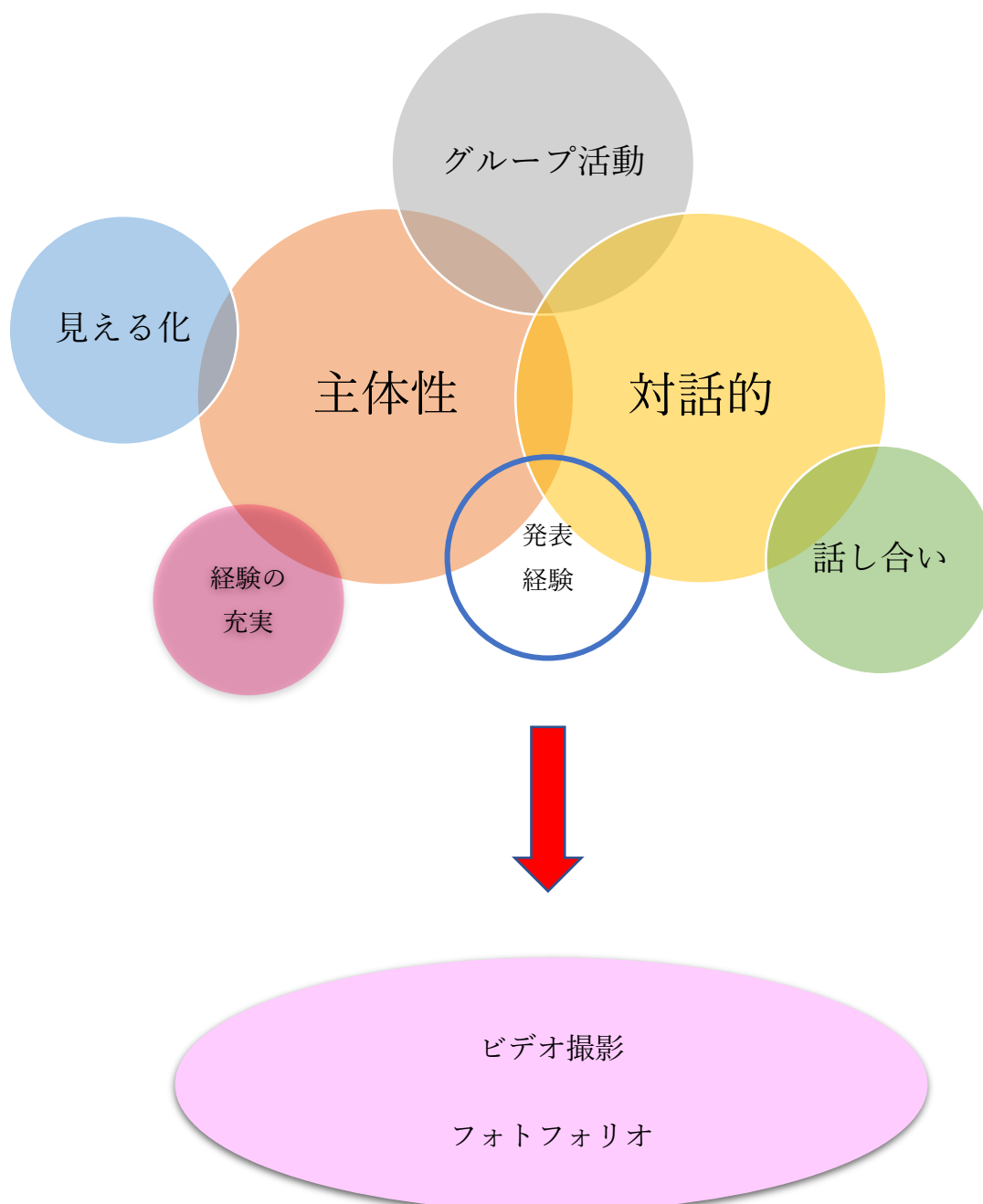


平成29年度 ガリバー組（5歳児）教材・保育研究

1 取り組みの概要

主体的で対話的な学びを充実させるため、ガリバー組ではグループ活動と話し合いの場を設け、一人一人が発言できる場を多くとるようにした。そして、様々な体験が楽しさや今後の意欲の繋がると考え、従来通りのサッカーやバスケットなどのスポーツ体験に加え、乗車、買い物体験などを積極的に行った。また、意欲が持てるよう、大量制作が必要な際は現在何個作っているか、マラソン練習ではどの程度速くなったかを表にすることで、教材の見える化に努めた。

子どもたちがどのような姿で参加しているか、どう友達と関わっているか、保護者に伝えるツール（評価）としてビデオ撮影やフォトフォリオを活用した。



2 活動例と詳細

① グループ活動 (健康な心と体、自立性、協同性、思考力の芽生え、豊かな感性と表現)

a 列車制作 (作品展) : デザインから話し合い7~8人で一つの列車を制作する



デザインから模型、段ボール制作、色塗りまでを自由に行った。一人の子どもが全工程を仕切るグループ、自然と出来たリーダーに共感して進むグループ、それぞれが自由に作る事をお互いが理解し認め合うグループなど、グループ内の人間関係も、出来上がりも様々だった。子どもたちの自由な制作時間を設定したため、担任は子どもの反応や発言内容などに向き合う事が出来、友だちとの関わり方や感情の動きなどを傍で見守ることも出来た。

この活動を経て、友だち関係が変わった子どもが多く、活動前は言葉数が少なかった子どもが部屋で大きな声を出したり表情が明るくなったりした。

b 焼き肉屋材料制作 (ごっこあそび) : 自分が作りたい食材を作り方から友だちと話し合い、作る



焼肉屋を開くにあたり、メニュー決めを行った後、作りたい食材が同じだった友達と制作方法から考え話し合った。カルビに人数が集中し、松茸やピーマンには少人数かつ制作に消極的な子どもが集まったが、製作期間は長めに用意したため、様子を見守った。人数が多く制作好きが集まったカルビや鶏肉グループは、新聞紙を丸め画用紙で包み、さらにお花紙で仕上げるなど、手の込んだものになり、消極的な子ども同士が集まったグループは仕上がりが少々雑なもの穏やかな雰囲気の中自分たちのペースでゆっくり制作していた。後半、制作スピードに差が出たが、終わった子どもたちが他グループの手伝いを行い、全員で完成を目指す姿が見られた。

c 焼き肉屋衣装制作→お遊戯会衣装制作：自由な服作りの中で多くの素材に触れ、変身を楽しむ

おばけの焼き肉屋ではポリ袋での衣装制作を行った。当初は服作りのみを想定していたが、頭飾りや帽子で着飾る子どもが出始めると、「真似したい」と多くの子どもが思い思いのおバケを目指すようになった。グループ活動で対話的な関わりを重ねてきたため、「〇〇君、それどうやって作ったの?」と自分から聞きに行く姿や、分からないなりにいろいろな方法を試してみる姿が多く見られるようになった。

お遊戯会の THRILLER ではポリ袋から本物の服を加工する活動に繋げ、より、おバケに近い衣装づくりを行った。自由に「汚す」活動は初めてだったため、絵の具をつけたり服をビリビリに破いたり、思い切りのよい姿が見られた。

「変身」がねらいでもあったが、のちに出てくるファッションショーのポーズやお遊戯会でのゾンビのなりきりなどに表れているのではないかと感じている。

d 写真探しゲーム：園舎にあるものの一部の写真を見て、友だちと探し見つけるゲーム



作品展で列車制作を行うグループのまま、2学期初めから年末まで計4回行った。1回目、意欲的な子どもはあちこちへ動いてはいるもののグループの仲間を引き連れるわけではなく、消極的な子どもはグループ意識が無く雑談するなど、各グループがバラバラだった。この活動と同時進行で列車制作も進んだことで、少しずつグループの一員という意識が芽生え、まとまって動くようになり、発言が増えたことで相談する姿が多く見られるようになったり、見つけた時は共に喜びあったりするようになった。

e 想像お絵かきゲーム：文章を聞き、グループで想像し合いながら絵で表現するゲーム

みどりいろの おおきなわくせいがあります
そのわくせいには うさぎが すんでいます
みどりいろのわくせいの となりには
ちゅうくらのいの ちきゅうがあります
あ、ながれぼしが 2つ みえました



文章から大きさや場所を想像し自由に描く。聴く力と想像力が問われるが特に正解は設けていない。個人での活動ののち、グループで話し合っ、一つの絵を完成させる予定だったが、グループ活動まで時間をとれず、個人での活動で終わってしまった。同じ文章を聞いて描いたにも関わらず、友だちが全く別な絵を描いていたり、自分と違う表現方法をしていたり、お互いの絵を認め合う活動になった。

② 話し合い（道徳性・規範意識の芽生え、言葉による伝え合い、自然との関わり・生命尊重）

a いもむし、とかげの名前付け：話し合いやディベートを重ね、意見を言い合ったり受け入れたりする



園庭で芋虫を見つけ、虫かごがあることを伝えると飼いたいという子どもが多く、飼うことに。自然と名前を付ける流れになるが、一週間経っても決まらず芋虫は死んでしまう。「いつになっても名前が決まらなくて悲しくて死んじゃったのかな」という女児の呟きが、のちのトカゲ（かなへび）の名付けに影響する。

芋虫が死んでから数週間後、園舎玄関でトカゲを見つけ飼うことに。同じように名付けの流れになるが、前回の件があるため早く決めなきゃと焦る子どもが多い中、2択まで絞られた名前から一向に進む気配はない。2グループ（大人数グループと少人数グループ）に分かれ、ディベートを行いそれぞれの名前の良さを伝え合うことで仲間を増やすよう指示を出すと、大人数の意見に圧倒され移動する子どもが出たのをきっかけに、少人数派が全員移動し名前は決定した。相手を納得させられるよう考えてから発言する姿、「かっこいいから」の一点張りの姿、集団の力に圧倒される姿など、集団ならではの一幕となった。

b ごっこあそびの店決め：話し合いやディベートを重ね、意見を言い合ったり受け入れたりする



20個程度案が出て、最後、おばけやしき（K君1人）と焼肉屋（29人）の二択になった。K君はおばけの服の作り方を伝えることで仲間を増やそうとしていたが、なかなか移動してくれない。最終的にK君は「僕が焼肉屋にすればみんなが喜ぶから」と泣きながら焼肉屋に移動する。焼肉屋とおばけやしき両方は出来ないか保育教諭が提案すると、Rちゃんが「さっきK君が言った方法でおばけの服を作ればおばけの焼肉屋ができるかも」と発言したことで皆が納得した形で「おばけの焼き肉屋」に決定した。

③ 見える化（数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚）

a 活動記録の掲示：どのような活動をしてきたか振り返り、充実感に繋げる



今まで取り組んできた姿や、園生活での様子を思い出す事が出来、その時の様子を一緒に写っている友だちに話しかけたり、遊ぶ様子を見てまたやりたいと思ったりする姿が見られた。

b 材料制作個数表：完成までの見通しを持ち、意欲的に取り組めるようにする（下図左）

つくるわす	120こ
カルビ	122こ
ぎゅうたん	121
とりにく	120こ
ハム	121こ
ヒーマン	123こ
まつたけ	151こ
とうもろこし	122
マヌマロ	121こ

←見通しを持ちやすい。数が増えているため充実感や達成までの意欲を高めることができた。

→前回と比べてどの程度速くなったか分かりやすく意欲に繋がりがやすかった。友だちがどれぐらいの速さで走っているかも知る事が出来た。

氏名	男子小1	女子小1	男子小2	女子小2	男子小3	女子小3	男子小4	女子小4	男子小5	女子小5	男子小6	女子小6	男子小7	女子小7	男子小8	女子小8	男子小9	女子小9
...

c マラソン大会タイム表：どの程度速くなったか数字で分かりやすく表示する、数字に関心を持つ（上図右）

④ 体験活動（社会生活との関わり、数量や図形標識や文字などへの関心・感覚）

a サッカー、バスケットボール、消防署、老人ホーム体験（これまで同様）

b 乗車体験：乗車マナーやルールを知り、窓からの風景も楽しむ

c 買い物体験：200円で計画的な買い物を行う、お金の使い方を知る
食材に愛着を持つ



⑤ 発表経験（自立心、言葉による伝え合い）

作品展時の列車制作では途中経過として、デザイン発表、デザインの色塗り発表、ミニチュア制作完成発表、段ボール制作発表、完成発表と、区切りのたびに発表を行なった。初めは誰もがその役を嫌がり、泣く子どももいた。発表を重ねる中で、友だちが行う姿に自分も出来るのではないかという安心感を持ったのか、抵抗が無くなった様子が見られ、友だちに「やって！」と言われても「わかったよー」と受け入れるようになった。また、「僕がやる！」と意欲的な様子もあった。

この発表経験が、公開保育時のファッションショーに繋がり、多少の恥ずかしさはあれど、自分の服を自分の言葉で、自分のポーズで発表することが出来た。



発表のやり取りのなかで、質問を積極的に行う姿も見られるようになった。質問をするということは、その友だちに関心を持って見聞きしていると捉え、発表経験が人間関係にも影響を与えたとも感じている。

3 評価方法

主体性の有無ではなく、その子どもの主体性がどの程度の到達地点でどのような時に発揮されているかの目安を持つため、表を作成した。

評価基準は、

- ① 活動に参加しているか
- ② 発言しているか
- ③ 意見をまとめているか（受け入れているか）
- ④ 発表に意欲的か
- ⑤ 発表の際、自らの言葉で話すことが出来ているか

この5つに分類し、月ごとに一番成長が見られた部分に矢印を伸ばし具体的な姿を添え、フォトフォリオに生かした。

また、毎日一人一人の様子を記録することが難しいことと、静止画や文章だけでは子どもの取り組み姿勢や反応を保護者に伝えづらいことを考慮し、どの活動でもビデオ撮影を行うようにした。その時の表情や発言も知る事が出来、良い判断材料になった。

作品展での電車制作では、どういった経緯で出来上がったかをビデオを編集し作品展で流した。保護者に伝わりやすく、普段、どのような姿で過ごしているか、知ってもらい、よい材料になった。

4 まとめ

2学期以降、形式のない自由な制作活動や話し合う時間などをとることが出来、子どもたちも意欲的に参加していたように思う。また、そのような姿を傍で見守ることが出来た。

3学期はインフルエンザによる欠席やお遊戯会練習で、グループ制作の時間はとることは難しかったが、仏参当番決めでは、意外な子どもが挙手したり、お遊戯会での楽器決めではほとんどの子どもが太鼓・鉄琴などの打楽器に意欲的になったりしていた。一連の活動で、意欲や主体性、言葉を通じた友だちとの関わり方など、伸ばすことが出来たのではないかと感じている。

また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の全ての項目に関連する活動が出来ていた。これからもバランスよく10の姿から様々な活動へ繋がられるような保育活動を実践出来たらと感じている。